



1. 歩行者と交通事故
2. 教育ママと親父さん
3. 四季のいたずら

1. 歩行者の交通事故による死亡傷害件数は年々増加し、事故発生のたびにその対策が云々されるのが常であった。東京の環状七号線は「魔の環七」ともいわれ、昭和 39 年開通以来歩行者の事故が頻発し「歩行者行政不在の道路」と批判されていた。歩行者事故の原因は、道幅が広いため歩行者が渡り切らないうちに高速の自動車にはねられるという場合が多いということであり、このため横断歩道橋、信号機、ガードレール、中央分離帯などの整備によって、自動車と歩行者の分離をはかるという方針で安全対策が実施され、歩道橋については開通当時 14 カ所だったのが現在では 32 カ所になっており、また信号機のついていない横断歩道は順次へらすというように、安全施設の拡充につとめた結果、今年に入ってからは現在まで歩行者の事故による死亡はゼロという好結果が得られている。この例からわかるように、交通事故撲滅はかけ声だけではだめで、実際の安全施設一つを設ける方が効果があるということは明白である。このことは、何も東京環状七号線に限らず全国の道路についてもいえることで、その道路の実状に応じて歩行者の安全のためには、歩道橋、信号機、ガードレールの設置、自動車同士の安全のためには中央分離帯を設ける等、かけ声ばかりでなく着実に一つ一つ実行に移すことにより、運転者の自覚と相まって交通事故ゼロに一步でも近づきたいものである。 [S]

2. 全国の土木工学科の学生数も年々増加し、今年も多く卒業生が社会に巣立っていった。一部にあまり土木の学生の数を増やすと結局大学出の価値を下げてしまうので、なるべく数を増やさない方がよいという声もあるが、土木界一般のレベルを向上させる上では結構なことだと思う。しかしもっと重要なことは、これら大学生の質の問題であろう。彼等の多くは、いわゆる教育ママに育て上げられ、激烈な入試競争に打ち勝ってきた連中であり、教育の進歩と相まってますます優秀な学生になってこなければならぬはずである。ところがここ数年学生に接して感じることは、彼等は一般に無気力化し、自分自身で自らの道を開拓してゆく意欲が見られないことである。学力も必ずしも上がってきているとは感じられない。いつの時代でも、社会を築き上げてゆくのに一番大切なのは人材である。人材をつくり上げるには、現在の姿で大学生が選り出されることのないように教育制度を改めてゆくとともに、父親が自分達がしようとしていることを肌で後継者に伝えてゆくことが大切なのではあるまいか。 [C]

3. 社会のいろんな機構が発達しているいわゆる文明国と称されるなかで、日本ほど気候風土に恵まれた国は数少ないのではなかろうか。狭いながらも春、夏、秋、冬とそれぞれの季節から得られる変化に富んだ物質は非常に貴重なものであり、また人間性も変化に順応できる豊かさを持っている。

ところが、この恵まれた季節の変化がわれわれのたずさわっている土木工事にとっては大変ないたずらものであるわけである。春から夏にかけての雪国での仕事量は、いわば年間の仕事を半年でやらなければならぬわけだから、よほど計画と実施に気を配らなければ一から出直し同然の結果を生むことになる。また、夏から秋にかけては台風が日本全土を襲ってくる。毎年あの惨状を見ると、原子力の平和利用がここで何とか実現しないものだろうかと考えさせられる。さらに冬季における凍結による事故も、コンクリート関係の工事ばかりでなく、他の材料にも数多くの問題を残している。四季の変化に富んでいることは、とりもなおさず乾湿の差が激しいことでもある。鋼材の研究が時代とともに進み、わが国でも耐候性鋼材が広範囲にわたって使用されつつあるが、さびの異常な発生が日本の現実であって、アメリカのように、その本質を活かした、はだか使用ができない悩みもここにあり、それに適した塗料の研究がさらに望まれるという荷物まで背負われているわけである。

別の見方をすれば、われわれは季節の変化に応じた研究課題にも恵まれ、技術的にまだまだ開発進展の余地があるのかもしれない。 [J]